

ドイツスポーツ史の発展に向けた10の命題 —クリスティアーネ・アイゼンベルク「スポーツ史における 社会学，経済学そして『文化経済学』のアプローチ —新しい方向のための提言」に対するコメント—

ミヒャエル・クリューガー* 著
有賀 郁敏** 訳

スポーツ史家は、他のすべての研究者のように、その専門性、ディシプリン、研究対象範囲を批判的に吟味しなくてはならない。すなわち、どのようなテーマや問題を扱うべきか、どのような方法を用いてそれをよりよく叙述するのか、そのためにいかなる史料と経験的な証拠を使用しうのか、どのような理論枠組みと研究の方向性が有効なのか、そしてとりわけ固有の学問的専門分野と他の学問分野との関係が解明されなくてはならない。スポーツ史の場合、もっぱら「親学問」との関係が問題となる。スポーツ史には、2つの親が存在する。このたとえはしっくりしないと思われるかもしれない。しかし、私はその比喻にこだわり続けたい。一般史はスポーツ史の親学問分野である。一般史は古く、由緒あるものなので、すでにそれはスポーツ史の祖母学問あるいは曾祖母学問とみなすことができるだろう。一般史は多くの子どもと孫そして曾孫がいるので、そもそもスポーツ

史を一つの正当な後継者と見なすべきかを確証すること自体、困難である。スポーツ史はまた、スポーツ科学の試験管ベビーとして見なすこともできる。このアカデミックな専門分野はスポーツ史と同様に非常に若く、伝統がないので、スポーツ科学とスポーツ史の親子関係のメタファーが反転しないかどうか問題とすべきである。

それゆえ、クリスティアーネ・アイゼンベルク——氏は一般史の中で頭角をあらわし、また数多の出版物、とりわけ氏の著作『英国スポーツとドイツ市民』によって、スポーツのテーマが一般史においても学問としてふさわしい研究対象として見なされることに貢献した——が前稿でスポーツ史の学問的、理論的課題や問題に関して立場を明らかにし、また専門分野の「新しい研究方向」へ向けた提案をおこなった点を歓迎したい。アイゼンベルクの論拠のよりよい理解、そしてスポーツ史の学問的、理論的立場をめぐる議論の深化のために、私は氏の分析視点ならびに具体的提案である「新しい研究方向のための提言」を、以下の10点において批判的かつ学問史的に論及したい。

* ミュンスター大学スポーツ科学インスティテュート教授

** 立命館大学産業社会学部教授

(1)

クリスティアーネ・アイゼンベルクは「ドイツにおけるスポーツ史家」（その際、公平性に鑑み、この批判に受けて立たすべき女性スポーツ史家もいることを断っておかなくてはならない）に対して明確に異議を唱えている。スポーツ史家は、たとえば英国における氏の研究仲間とは異なって、自覚的に「対象相関的」テーマ、すなわちスポーツに向き合うことなく、権威妄信的に「親学問」〔歴史学〕を見つめていないか、と。その結果、「近代スポーツの発展はドイツのスポーツ史研究においては、一般的に政治、社会構造の反映として見なされ、他方において研究対象に固有な力動性やその形成能力は、露出不足のままとなっている」と氏は論じる。別言すれば、氏のドイツのスポーツ史家に対する非難は次のようなものとなる。すなわち、平凡かつ愚直であり、近代の学問的議論の水準に到達しておらず、それらはスポーツという「対象」とその「力動性」を正当に評価する研究ではない（あるいは不十分である）、と。これらの批判はドイツのスポーツ史研究の中で、とりわけ軽んじられてきたテーマ、すなわちアイゼンベルクの言葉を用いれば、スポーツの領域におけるスポーツの商業化と経済化そして「文化経済学」の事例を用いて明らかにされている。

(2)

この非難はしかし、せいぜいのところ以下の点が適切である限りにおいて正当性をもつ。すなわち「ドイツのスポーツ史研究」において、

とりわけ現代史的な視点に携わり、国民社会主義、それ以前のワイマール共和国そして後のドイツ連邦共和国と東ドイツの時代におけるスポーツの政治的、社会的従属化と道具化を際立たせようと努力する、紛れもなく世論形成的、構造形成的な方向性があった、あるいはあることである。その際、次のことを理解し、考慮しなくてはならない。このようなハヨー・ベルネット (Hajo Bernett)、彼の弟子そして共同研究者によって学問的に特徴づけられた国民社会主義下のスポーツの政治史に関する重要かつ指標となるスポーツ史の成果は、1970年代まで支配的だったスポーツの「独自世界」のイデオロギー、すなわち政治、経済そして近代世界における他の文化領域とは別に展開するスポーツの生活世界の独自性と力動性という表象に対する一つの批判的解答でもあったことである。ベルネット、タイヒラー (Teichler)、プファイファー (Pfeiffer)、ブス (Buss)、ニツチュ (Nitsch) そしてとりわけ国民社会主義の文脈においてスポーツや労働者スポーツそして戦後のスポーツの現代史的問題を扱ってきたその他の研究者たちは、スポーツの独自性——要するに常にアマチュアスポーツが考えられた——の命題に疑問を投げかけてきたのである。そしてこの試みは成功した。スポーツが常に「政治的であること」は自明であったし、当然のことである。仮にクリスティアーネ・アイゼンベルクの勧めに従うならば、スポーツがその政治的純潔さをなお失ってはいなかったと信じた場合、それはある意味では、こうした時代への逆行を意味する。このことは可能でも、好ましいことでもない。いわゆるベルネット学派の決して軽視してはならない成果は、近代のスポーツ展開における政治的、社会的な網目の結合を解明してきた点にあ

る。

(3)

アイゼンベルクがスポーツ史家について語る
とき、最初にドイツにおけるスポーツ史家とは
誰なのか、また過去においては誰だったのか、
ドイツにおけるスポーツ史はどのような伝統を
保有しているのかを問うべきである。ドイツの
スポーツ科学におけるスポーツ史のアカデミッ
クな分野は、スポーツ科学が学際的な性格をと
もなったアカデミックな分野として大学に誕生
した1960年代後半と70年代以降、存在してい
る。スポーツ史はこの学際分野としてのスポー
ツ科学のなかで、従属的とまでは言わないま
でも、側面的な役割のみを演じてきたし、演じて
いる。なぜならば大学における学問としてのス
ポーツのアカデミックな「貴族化」の最も重要
な根拠は、なんとといってもドイツにおけるス
ポーツそして高競技力スポーツの近代的発展を科
学的にサポートし、促進させることの中に存在
していたからである。1972年のミュンヘンオリ
ンピック競技会の開催が決まり、若い新しいス
ポーツという学問はそこから大きな利益を得る
ことになり、加えてスポーツは東西ドイツの対
立の中で冷戦下の誤って考えられた武器として
科学的にも武装された。東ドイツではスポーツ
史もそれに貢献した。というのは、スポーツ史
はイデオロギー的な競争指導の手段として利用
できたからである。西ドイツでは科学技術と教
育学をより重視したが、西ドイツのスポーツ科
学はスポーツ史をこのスポーツ科学の部分領域
として位置づけ、発展させた。それはとりわ
け、トゥルネン、トゥルネン文献学そして身体
教育の伝統に由来し、戦後「身体教育の理論」

や後にスポーツ科学を大学で代表していた教授
たちによってなされた。ハヨー・ベルネットは
この世代の事例である。彼は専門的な歴史家で
はなく、とりわけ個人的、伝記的な動機から、
自身の専門の過去を批判的に再生することに貢
献したかった身体教育者、スポーツ教育学者と
して理解された。6巻の身体運動の世界史の編
者であるホルスト・ユーパーホルスト (Horst
Ueberhorst) は、新分野であるスポーツ科学の
中に根をはった、さらに新しいドイツスポー
ツ史研究の成果を示す優れた第2の事例である。
2つの講座 (C3)——正教授の講座ではない
——はベルネットとユーパーホルストの退職
後、再びスポーツ史家によって占められなかつ
た。同様の運命を東ドイツ崩壊の東地区のドイ
ツにおけるスポーツ史教授職も経験することにな
った。結果的として、今日、ドイツにおいて
はスポーツ史の正教授の講座 (C-4 講座) は
一つ、つまりケルン体育大学の中にあるだけ
である。それは年配のスポーツ史家によって占め
られている¹⁾。スポーツ史はもっぱらスポーツ
科学の中で、またスポーツ教育学の部分領域に
おけるスポーツ教師養成の枠組みの中で定着し
ている。要するに、スポーツ史はドイツにおけ
るスポーツ科学の中で独自の部分領域としても
はや代表できなくなっている²⁾。それはスポー
ツ科学の複数の教授が、一部は専門的かつきめ
細かくスポーツの歴史を扱っているにもかかわらず、
である³⁾。

(4)

スポーツ科学分野の創設は——その代表者た
ちはその中で「スポーツ」という研究対象が包
括的かつ学際的に、つまり歴史的にも論じられ

ることができる学問を発展させたいと要求しているが——ドイツのトゥルネン史叙述と身体運動の歴史研究におけるこれまでの一連の伝統を機能停止に追い込むという結果をもたらした。そうした伝統は、19世紀以来、歴史家、文献学者そして研究者によって取り組まれてきたものであり、彼らはトゥルネン、トゥルネン運動そしてスポーツの課題に真剣に打ち込み、身体運動、体操、トゥルネン、遊戯そしてスポーツを歴史的にも正当化するために貢献したのである。例を挙げれば、オットー・ハインリヒ・イエーガー (Otto Heinrich Jaeger) からフリードリヒ・アルベルト・ラング (Friedrich Albert Lange) を経由してカール・オイラー (Karl Euler), そして——20世紀における——エドムント・ノイエンドルフ (Edmund Neuendorff) までの「トゥルネン文献学者」、さらに古代ギリシアのスポーツ史、古典古代における体操と競技者の歴史のパイオニアである、ユリウス・ユットウナー (Julius Jüthner) やフリードリヒ・ブライン (Friedrich Brein) が存在する。1920年代にルドルフ・ガッシュ (Rudolf Gasch) によって新たに出版された『トゥルネン総覧ハンドブック』のような優れたスポーツ史的な著作、あるいはノイエンドルフによる4巻からなる『新ドイツ体育史』、1926年にボーゲンク (Bogeng) によって編集され、今日まで類例のない『すべての民族と時代のスポーツ史』もまた、ドイツのスポーツ史研究のこれら偉大な伝統の典型的な表れである。それらはクリスティアーネ・アイゼンベルクが今日要求しているもの、つまり近代の新たな生活領域——スポーツ——の文化的動性を浮き彫りにしようとする努力によって担われてきたのである。

(5)

つまり、ドイツのスポーツ史叙述の展開はアイゼンベルクが提示した事柄とはまったく異なって推移してきたのである。19世紀のトゥルネン史家とトゥルネン文献学者以来、ドイツにおけるスポーツ史家は「一般史」の内容と方法への適応を通じて際立ったのではなく、むしろ彼らがこれら生活範囲の歴史的次元と文化的意味を浮き彫りにすることを通じて、文化における体操、トゥルネン、遊戯そしてスポーツという研究対象の拠り所の特徴をめぐって、ボーゲンクによる巻のタイトルにあるように「すべての民族と時代」のために努力してきたのである。すでに見てきたように、彼らはまた、20世紀の一般史学が政治史から文化・社会史へのパラダイム転換を経験するうえでささやかな貢献を行ったのである。なぜならば、政治の偉人たちだけが世界の進展を決めるのではなく、多くの大小の歯車がそれを動かすために互いに関与していることを、もはや見逃すことはできないからである。スポーツは本質的な意味において、その中の一つといえるのである。

(6)

スポーツ科学が1970年代初頭までに創設されると、いわゆる親学問の代表者は「スポーツ」という研究対象への関心をますます減少させるという結果を招いた。その理由はスポーツを学問的に大学で研究する完全な分野が誕生したからである。換言すれば、「身体教育」について意見を述べた1920年代そして30年代のヘルマン・ノール (Hermann Nohl) あるいはエデュ

アルト・シュブランガー（Eduard Spranger）に匹敵するような人物は存在しなくなり、今やこの課題は職業としてのスポーツ教育学者がスポーツ科学のなかで取り組むことになった。たとえスポーツ教育学がスポーツ科学の中で尊敬に値する研究成果を提供しているとはいえ、教育学のハンドブックや事典の中にスポーツに関する事柄を見つけることは非常にまれである。同様なことはスポーツ史に当てはまる。スポーツ史への一般史家の遍歴は、1990年代まで非常にまれであり、また近年になってようやく「スポーツ」という研究対象への専門史家の関心が再び増大してきた。その理由は「社会史」の新たなパラダイムが、今や生活によって満たされねばならないからである⁴⁾。（僅かな）スポーツ史家は彼らの側で、スポーツテーマの社会的、そして社会史的な組み入れに努力してきた。その際、いずれにせよさまざまな時期の専門家を区別しなくてはならない。すなわち古代スポーツ史は、常にそして今日まで古代史家と考古学者が取り組んできたテーマを維持してきた。この点は、ユリウス・ユットウナーからインゴマー・ヴァイラー（Ingomar Weiler）、またエルンスト・クルティウス（Ernst Curtius）、ヴィルヘルム・デルプフェルト（Wilhelm Dörpfeld）からウルリヒ・ジン（Ulrich Sinn）まであてはまる。スポーツ領域でのより新しい、現代史的研究はこれとまったく様相を異にする。たとえば、ハインリヒ・フォン・トライチュケ（Heinrich von Treitschke）が19世紀にヤーンと彼の時代を論じたように、クリスティアーネ・アイゼンベルクの著作が発表されるまで、一般史の中に「スポーツ」という研究対象に集中的に取り組んだ者は存在しなかった。スポーツ史がスポーツ科学抜きに効果的に進めら

れてきたことは、他国の事例が示している。これらの国は、確かにドイツのように高度に細分化されたスポーツ科学を利用できなかったが、しかし、たとえばアメリカ合衆国のように、スポーツ史的に見た場合、非常に生産的である。アレン・グットマン（Allen Guttman）、リチャード・マンデル（Richard Mandell）、そしてジョン・ホバーマン（John Hoberman）はスポーツ史家ではなく、アメリカ研究者、ドイツ研究者である。

（7）

結果として、最近になって「スポーツ」というテーマを扱った（スポーツ）史料編纂的に興味深い変化が生じてきた。すなわち、一般史家は（再び）スポーツのテーマに専念し、またスポーツ史家は歴史学や歴史理論からの刺激を汲み上げようと試みている。彼らは社会史、身体史、国民史、文化史などの中で遭遇する。しかしながら、このような現象は問題なく生じているのではない。なぜならば残念なことに先行研究の成果が必ずしも十分には認められていないからである。2つの事例を示しておこう。最初の事例はクリスティアーネ・アイゼンベルク自身の著作、『英国のスポーツとドイツ市民』にあてはまる。それはドイツと英国のスポーツ史に関する手堅い著作ではあるが、しかしドイツのスポーツ史研究の成果、つまりトゥルネン史及びスポーツの現代史に対する考慮抜きに概括的かつ画一的に叙述されている。この点は、アイゼンベルクによって言及され、その本質において正当化することはできない「ベルネット学派」に対する批判にも該当する。ハンス・ヨアヒム・タイヒラーもまた、アイゼンベルクの著

作の書評の中でこの点に立ち入って論じている。彼女はトゥルネン史の叙述に際して、過去のトゥルネン史研究に対する十分な考慮を省いたのみならず、比較的最近公表されたトゥルネン史研究の成果との詳細な討論を断念したように思われる。私はここで不十分にして誤解されて受容されたのみならず、文献一覧にすら掲載されなかった私の著作、『身体文化と国民形成』のみを念頭に置いているのではない。アイゼンベルク以外にも、いわゆる一般史の系譜からの研究の事例をあげることができる。それらはいずれにせよ、トゥルネンとスポーツという研究対象を扱っているが、しかしスポーツ科学とスポーツ史の先行研究をまったく、あるいはほとんど引証していない。ネガティブな評価において最も際立った事例は、スヴェンヤ・ゴルターマン (Svenja Goltermann) による『国民の身体』といった誤解を招くタイトルが付された拙劣な学位論文である。たとえ「身体」という概念がタイトルに使用されたとしても、所詮はトゥルネン史の先行研究を参照しない古い政治的なトゥルネン史である。この文献は、身体史、社会史、あるいは文化史をほとんどあるいはまったく問題にしていない。この点はこの著作が社会史家ヴェーラー (Wehler) によって指導されたがゆえに一層理解できないことである。第2の事例は、まさに歴史的、社会学的な流行テーマである「身体」と関連している。昨今、このテーマに関する夥しい数の著作が刊行されている。たとえば、『ある身体の歴史 1765-1914』という副題が付されたフィリップ・ザラジン (Pfilipp Sarasin) の多方面から称賛されている著作がそれである。彼はきわめて慎重にある身体の歴史について叙述し、身体の歴史全体について叙述しない。それにもかかわらず、こ

のような基本的な研究に対して以下のような期待をしてもよいだろう。すなわち、単なる(彼の)身体史以外からも受け入れられること、また他の身体史と身体コンセプトとの妥当な討論、たとえばスポーツ史ないし身体教育の理論と歴史の視点から書かれた身体の歴史との討論が行われるだろうことである。残念ながら、このことは極めて希少であるか、端緒的なものにすぎない。

(8)

アイゼンベルクがスポーツ史家について語る時、彼女は明らかにスポーツ科学の領域で大学の職にあるスポーツ史家の代表者とその周辺、すなわち歴史的なテーマを扱っているスポーツ科学とスポーツ教育学のインスティテュートや講座の関係者や博士学位有資格者などをイメージしている。しかしながら、これらの人びとはスポーツ史を研究している人びとのうち比較的限られた部分にすぎない。ドイツにおいては地域におけるスポーツ史学会、スポーツ博物館、歴史会館、協会そして団体の史料館、ならびに市、州そして連邦の史料館に属し、極的に活動している名誉職のスポーツ史家たちの活動分野がある。ドイツスポーツ学会のスポーツ史専門分科会は、ドイツにおける地方のスポーツ史研究の問題を、すでに何度もテーマ化し、またそれに関する学会大会も開催してきた。さらに、「ケルンドイツスポーツ・オリンピック博物館」、ベルリンスポーツ博物館、ライプツィヒスポーツ博物館、ならびにこれら「草の根歴史家」の研究を促進し、その成果を公表し、場合によってはコーディネートするニーダーザクセンスポーツ史学会 (NISH) そしてバーデン・

ヴェルテンベルクスポーツ史学会の活動もある。2003年にはケルンにおいて「社団法人ドイツスポーツ博物館、スポーツ史料収集協会」が設立されたが、当協会は上記の課題を将来において代表し、一方において狭義の意味の大学におけるアカデミックなスポーツ史と他方において自由に活動している、いわゆるアマチュアスポーツ史家との仲介役として活動したいと考えている。ドイツにおけるスポーツ史家は「スポーツ」という研究対象に内在する独自の文化的力動性を看過しているのではないか、というクリスティアーネ・アイゼンベルクの問題提起に対しては、その力動性はこのような地方のスポーツ史家の研究の中で非常に特有な形で示されていると返答しなくてはならない。

(9)

また、アマチュアや独学者は本質的にスポーツ史という分野の発展に貢献し、また専門的な学問分野の発展にとって重要な研究や下準備を行ってきたことを忘れてはならないであろう。その際、非常に罵られ批判されたカール・ディーム（Carl Diem）のスポーツ史の著作は完全に上位の部類であり、またエトムント・ノイエンドルフも、その中に数えることができる。たとえこれらの研究が、現代の学問的な厳しい基準に耐えることができないにしても、しかしそれらは学問的な刺激を提供し、現代の専門的なスポーツ史研究が見逃せない基準を設定することができたのである。

(10)

スポーツの経済学的発展に重点的に取り組む

べきだというアイゼンベルクの奨励は、一面において支持できる。しかし、彼女はいずれにせよこの要求によって無駄骨を折っている。というのは、この視点は遠の昔に提案されているからである。たとえばポツダム大学におけるハンス・ヨアヒム・タイヒラーと彼の同僚たちが東ドイツにおけるスポーツの崩壊をまさに経済的観点から歴史的に探究し、証明しようとした努力だけをみてもわかることである⁵⁾。他方で、スポーツ史の経済化に対しては、スポーツ史の政治化に対して投げかけられた同様な理由から批判的に対応すべきである。スポーツのダイナミズムは、政治そして経済だけで解明することはできない。ダイナミズムはさまざまな条件とプロセスの相互依存のなかで、はじめて明らかにできるのである。

注

- 1) ケルン体育大学では、スポーツ史の2人の教授職がある。また、C3教授職は、奇妙なことだが、「古代」より正確にはエジプトのスポーツ史の専門家であめられている。
- 2) 例外がある。ポツダム大学のH. J. タイヒラーによって代表されている「スポーツの現代史」のためのC3講座である。ベルリン自由大学のゲルトルート・プフィスターが就いていたスポーツ史とスポーツ社会学講座（C3講座）は消滅した。またゲッティンゲン大学のアルント・クリューガーとミュンスター大学のミヒャエル・クリューガーはスポーツ科学ないしスポーツ教育学のC4教授として、優先的にスポーツ史に取り組んでいる。
- 3) たとえば、オリピズムそしてオリピック史の専門家、マインツ大学のノルベルト・ミュラーはそれに該当する。
- 4) 奇妙なことに、社会史の主唱者たるハンス・ウルリヒ・ヴェーラーの著作にはスポーツは見られない。このことは氏の『ドイツ社会史』の

3巻本のみならず、2003年に刊行された第4巻——ここでは1914年から1949年まで、つまりスポーツが社会的な大衆現象へと発展し、また大きな文化的、政治的な役割を演じた時代が論じられている——にもあてはまる。社会的発展の本質的な視点を包括し、理解したいという高い要求があった社会史は、私の考えではこの事実を黙殺することは許されない。

- 5) Vgl. TeichlerとReunartz (1999, 特に第II章, S. 87-115)。そこでは東ドイツにとっての「高競技力スポーツの総コスト」——その展開は一方で東ドイツの経済的な弱さの徴候として見なすことができ、他方でそれによって東ドイツの破産を加速させることに貢献した——を国民経済的に算定しようという試みがなされている。

文献

- Bernett, H. (1996), *Nationalsozialistische Leibeserziehung. Eine Dokumentation ihrer Theorie und Organisation*. Schorndorf: Hofmann.
- Bogeng, G. A. E. (Hrsg.). (1926), *Geschichte des Sports aller Völker und Zeiten*. Leipzig: Seemann.
- Eisenberg, C. (1999), *English Sports und deutsche Bürger. Eine Gesellschaftsgeschichte 1800-1939*. Paderborn: Schönigh.
- Gasch, R. (Hrsg.). (1893), *Das gesamte Turnwesen*. Hof: Lion.
- Goltermann, S. (1998), *Körper der Nation*. Göttingen: Vanderhoek & Ruprecht.
- Krüger, M. (1996), *Körperkultur und Nationsbildung*. Schorndorf: Hofmann.
- Neuendorff, E. (1932), *Geschichte der neueren deutschen Leibesübung vom Beginn des 18. Jahrhunderts bis zur Gegenwart*. Dresden: Limpert.
- Sarasin, P. (2001), *Reizbare Maschinen. Eine Geschichte des Körpers 1765-1914*. Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- Teichler, H. J. & Reinartz, K. (1999), *Das Leistungssportsystem der DDR in den 80er Jahren und im Prozess derWande*. Schorndorf: Hofmann.
- Ueberhorst, H. (Hrsg.), (1972), *Geschichte der Leibesübngen*, Berlin: Bartels & Wernitz.
- Wehler, H.-U. (Hrsg.). (2003), *Deutsche Gesellschaftsgeschichte 1914-1949* (Band 4). München: C.H. Beck.